

嵐 祐稀さん

Arashi Yuki

建築板金の仕事を通じて、
ものづくりの楽しさに目覚めました



建築板金の仕事は チームワークが重要

5年ほど前に新築したという事務所棟は、道路に面して鋼板の外壁が美しいアールを描き、建築板金の技をアピールしています。勝泉昌紀社長が「2Fは従業員の休憩所になっているんですよ」と教えてくれました。

嵐祐稀さんはこの勝泉建築板金工業（津幡町）の最年少メンバーです。入社半年の感想を聞くと、「楽しいですよ」とポジティブな言葉が返ってきました。先輩と一緒に作業をしながら道具の使い方や施工技術について学ぶ毎日。その日の作業内容にもよりますが、朝は7時頃に会社に来社し、車に資材を積み込んで現場へと出発。朝礼を行った後、加工した金属板を屋根や外壁に取り付ける作業をスタートします。17時頃には会社に戻り、道具類を整理整頓して一日の業務を終えます。

Profile

羽咋市生まれ。小さい頃からバスケットボールに親しみ、鵬学園高等学校時代はバスケ部で活躍。金沢科学技術大学校（Kist）の建築学科で学んだ後、令和4（2022）年4月に勝泉建築板金工業に入社。今も週一でバスケの練習をしているほか、趣味のドライブも楽しむ。



株式会社勝泉建築板金工業（津幡町）

昭和10（1935）年に初代が鋸職人として「勝泉ブリキ店」を設立。その後、時代の流れとともに建築板金業へと移行。平成4（1992）年に法人化。現在の勝泉昌紀社長は3代目で、兄弟4人で役割分担しながら経営の舵を取る。【所在地】河北郡津幡町清水372-4 【資本金】1000万円 【代表】勝泉昌紀 【従業員数】9名



仕事のやりがい、
できるように
なることが喜び

ゼロから建物が完成する達成感も
大きいですが、僕個人としては「でき
きなかったことが、できるように
なること」に喜びを感じます。



株式会社だけアットホーム、アットホームだけ仕事となると
ピリッとした緊張感があります



職人の こだわり

営業車には毎朝、現場に必要な道具だけを積み込みます。道具の整理整頓は職人の基本です！

建築板金職人までの道のり

◎専門学校の建築学科で学ぶ

◎就職活動を経て、（株）勝泉建築板金工業に新卒入社

祖父が建築板金、父が設備工事という職人家系の家に生まれ育ち、自然にこの道を選びました。実は、僕の双子の弟は設備関係の会社で働いています。いつか兄弟で合流して家業を大きくする…という未来もあるかもしれません。（嵐さん）

嵐さんの「屋根仕事」のデビューは真夏でした。20メートルもの長尺の材料を5～6人がかりで抱え持ち、屋根の鉄骨の上をベースを合わせて歩きます。「暑い、怖い、重いでしたが、チームワークの心強さも知りました」と嵐さんはやっぱりポジティブです。

美しい「おさめかた」を 先輩の仕事ぶりに学ぶ

経験を積んだ先輩の仕事ぶりに学ぶことはたくさんあります。「建物によって形状が異なる屋根や外壁に合わせて、どのように金属板を施工していくか。さまざまなやり方がある中で、先輩はその場に合った『おさめかた』を即座に判断し、美しくスピーディーに仕上げます。自分は先輩と同じことはできないので、まずは時間をかけて丁寧に仕上げることから始め、そこからスピードを上げていくことを意識しています」。

特に形状の複雑な屋根は板金がさまざまな角度に入り組んでおり、角同士がぶつかる部分のおさめかたは、まさに職人技です。

公共施設など大きな現場に携わる一方で、地域に根差した会社として納屋を撤去するような小さな工事も行います。そんなときは「ごくろうさま」と差し入れをもらうこともあります、お客様と直接ふれあう楽しさも実感しています。

職業訓練校で学び 建築板金技能士の資格を目指す

任された仕事をきちんとこなす、一人前の職人になることが目標だという嵐さん。その証となる建築板金技能士資格を目指し、週に一度、建設共同高等職業訓練校に通って、建築板金の技術と知識を深めています。

板金の仕事をするようになって、自分の中で変わったことがふ

たつあると嵐さんはいいます。ひとつは、板金が用いられている建物に自然と目が行くようになり、「難しい仕事をしているな」「これはちょっと難かな」などと職人の腕を想像するようになったこと。もうひとつは、手を動かしてものをつくることが楽しくなったこと。自宅の古い倉庫をおしゃれなガレージに変身させようと、休日は朝から晩まで改装作業に没頭しているそう。ものづくりの発想と技術は、プライベートも豊かにしてくれます。

